



Title	蕪村とその連衆 : 虚栗調をめぐって
Author(s)	藤田, 眞一
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1978, 11, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/47778">https://hdl.handle.net/11094/47778</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 蕪村とその連衆

— 虚栗調をめぐる —

藤 田 真 一

金沢の麦水の編著『新みなし栗』（安永五年秋跋、翌年四月刊）に、蕪村門から四人の句が入集した。すなわち蕪村六句、几董八句、大魯四句、道立三句、計二十一句、そして上記四人による四吟歌仙一卷である。

俳壇的勢力をそれほどまず、他俳諧師との交渉にも必ずしも積極的でなかった蕪村たちにとって（最も広い窓口は几董だったようだ）、自門の撰集にないざしらず、金沢という異郷の地の俳諧師の撰集に、発句計二十一、歌仙一という入集数の多さは異例であり、注意を喚起するに十分である。ましてや『新みなし栗』という標題に示すごとく、虚栗調復興という明確かつ先鋭な意図に裏打ちされた撰集に、である。単に入集するという目的だけで蕪村たちが虚栗調による句作を一時的に試みたのだろうか。麦水の動向にただ呼応したというにとどまるものなのかどうか。虚栗調をめぐる蕪村たちの内情はそれほど単純であったのだろうか。虚栗調というものが蕪村たち四人のなかでどのように受容され、どんな意味をもつものだったのか、この考察が本稿の主題である。その際麦水の活動との関連が問題になるのはいうまでもないが、主題はあくまで蕪村たちの活動である。直接取り扱うのは、几董・麦水邂逅の安永二年から『新みなし栗』出版の安永六年にかけてである。

本題にはいる前に「虚栗調」について言及しておく。虚栗調の概念は必ずしも厳密でない。ただしその定義をあらかじめ下して限定するのではなく、蕪村たちにとつての虚栗調を論じていくことがむしろ重要である。ここではとりあえず『俳諧大辞典』の「虚栗調」の説明を借用する。すなわち「漢字、漢語を多く使用し、字あまりを好み、語調が固く稜があり、また漢詩文中の一句のように、不安定な、完結せぬ表現を特徴とする。中には、とくに奇をてらつた表現に傾いて、意味の解しにくいような作品も少なくない。」と。

## —

安永二年九月、京都から大坂に移つたばかりの大魯を訪れて、几董は浪華に遊んだ。折しも『蕉門一夜口授』上梓のために麦水も大坂にあつた。そこで几董は「廿一日瓦町二柳庵を訪。折ふし加賀の麦水もあり合せて相見」（『発句集』）ということになった。これが二人の初対面かどうかかわからないが、その交渉はそんなに昔に遡ることはない。麦水来坂の最大の関心事は『蕉門一夜口授』の出版であり、そしてこの書は虚栗調鼓吹の書であつた。二柳庵でここに話題が及ばないはずはなからう。また帰洛した几董が、麦水に合つたことやその時の話の内容を蕪村に報告しないはずはない。しかし几董はこれに関して何も書き留めていない。几董自身はこの出会いが今後どんな意味をもつか認識してはいなかつたかもしれないが、安永四年の再会、安永六年刊の『新みなし栗』の入集状況などを見通すことのできる私たちにとつて、これは一つの俳諧史的出会いということができらう。

そして翌安永三年になると、前年まではほとんど見られなかつた虚栗調風の句作が、几董の句稿に目立つようになる。いまそのうちよりいくつか抜粋してみよう。

野店無肴核橘花に酒をひたしけり

隣家に琴を聞て月をあはれむ独哉

今宵清光タリ月一步酒一盃

干鱈裂て冷酒一瓶錢す

(以上『ほく帖』)

『ほく帖』を繰ってゆくと、このような調子の句は外にも容易に拾い出すことができる。そしてこの傾向は秋から冬にかけて著しくなつてゆくようであり、翌年へも繋がるものであることを先取りして指摘しておこう。

この年八月中旬、几董はまた大坂へ下つて大魯を訪ねた。『ほく帖』には、このとき大魯が几董の句に加点した、そのうちの五句が書き留められている。

於芦陰舎四季句合 五句

大魯評

凧に争ふごとし鐘の声

十六点

瘦脚に落穂よけ行聖哉

十八点

埋火や附木なくせしかりの宿

十七点

唐茶煮て詫人富り秋の雨

十五点

酒に狂す武士見よや夏の月

廿点

大魯庵でこのような虚栗調を含む吟詠がなされ、大魯が判をしたということは注目に値する。なぜなら虚栗調が少くとも几董・大魯の間では諒解済みであったことを示しているからである。遺憾ながら大魯の句はわからない。

『新みなし栗』に入集した一人道立についても、『自在庵句集』によると、安永三年に次のような句を作つてい

る。

梅爛熳羅の帳に星の影

あらなにともな人ぞ何とて秋の空

灯消んとして疝気差出る火燧哉

これらはいずれも虚栗調といつてよい句だろう。この吟詠ぶりが几董あるいは蕪村の影響によるものかどうかは判然としない。道立が蕪村一門と同座するのは翌年一月が最初だといわれている<sup>(1)</sup>。もつとも蕪村個人との面識は宝暦まで遡るようだが、<sup>(2)</sup>具体的な交渉の事例は安永三年以前には一つもない。蕪村らとの影響関係はわからないが、道立自身の儒学者としての漢学の素養と以前からの俳諧への興味とが漢詩的調べにおいて合致したという考え方は成り立つだろう。

道立だけでなく、他の三人の間についても、句作の上で内的な交流をたどることは、安永三年に關してはほとんど困難である。ただ蕪村の「貧居八詠」が尾形怱氏の説<sup>(3)</sup>のごとくこの年冬の作だとすると、これは同年秋の大魯の「秋興八首」に促されたものかもしれない。いまは推論の域を出ない。彼らの交流の様子は定かでないが、虚栗調への関心の氣運が出てきていることは感じとれる。あるいは安永四年の虚栗調の句作の盛んな様子を見る<sup>(4)</sup>とき、安永三年の状態を逆に振り返って、その氣運の萌しをここに見る思いがするだろう。

そしてその安永四年である。

安永四年にはいる前に道立について少し触れておく。安永初年頃から彼は俳諧に急速に關心を寄せるようになった。道立自身の回想によると蕪村との交渉の開始ははるか以前だが、俳諧上の接触は認められない。なぜな

ら『明烏』（安永二年刊）以前の蕪村派の俳書に一句も見出だせず、安永五年版『初懐紙』にはじめてその名を見ることができるとだからである。また蕪村らの句会にも明和から安永三年にかけて一度も出座していないことを見て、道立の俳諧への身の入れ方に積極さを証明する要素はないといえよう。さらに、当時の俳人の句、とりわけ上方の俳人の句を広く集めた『俳諧新選』（安永二年刊）にも道立は一句も入集していない。『自在庵句集』にも安永二年は五句しか記されていない。それが安永三年二十九句、安永四年九十一句と激増し、他方句会への出座も安永四年以降頻繁となる。そして安永五年金福寺境内における芭蕉庵の再興が道立の発企によって実現の運びとなり、また秋には『続明烏』に序文を寄せるまでになるのである。安永期前半の道立の俳諧活動を外側から大雑把に眺めるとかくのごときであり、夜半亭内の俳諧活動の表面に急に躍り出てきたとの印象は免かれないだろう。しかし江戸中期上方の大儒江村北海を父に持ち、また博覧多識をもつてなる同じく儒学者清田儋叟を伯父にもつ道立が、その教養の豊かさ、血統のよさをもつて、夜半亭社中の重鎮たりえたことは容易に納得できるだろう。

そこで次に彼の俳諧活動を夜半亭社中の内部的交流と共に見てゆこう。道立の俳諧への身の入れ方は、蕪村たちとの交流の高まりと軌を一にしているように思われる。すなわち安永四年初春蕪村・几董・大魯との四吟歌仙ではじめて同座したのを皮切りに、一月二十九日には几董と同道して金福寺に遊んだ。

六月になると几董・道立は連れ立って大坂に下った。『ほく帖』によると、「六月五日、道立子同行浪華に行、舟中探題 線香一寸即案」として几董の句合計三十が記録されている。その記事の直後に、

道立子が一丈の山一尺の牡丹哉といふ句に対す

さみだれや一寸の馬豆の人

と記されている。これも大坂での句である。対されている道立の

一丈の山一尺の牡丹哉

という句は、『自在庵句集』安永四年夏の条にある「以下五句線香」というなかの一句である。同じその五句のなかに「都より難波へとてぞ一夜鮮」という句があることから考えて、この即吟は、几董の「線香一寸即案」と同様、大坂へ下る舟中でのものだろう。とするとこの詞書は、几董が舟中での道立の句に興を覚えて和した、ということを明らかにするものである。

ところで二人のこのやりとりの眼目は、一方の「一丈の山一尺の牡丹」という対句語法に対して、他方が「一寸の馬豆の人」という同じく数量的な対句語法で応じた点にあることはいうまでもない。さらに前者は絵画技法にいう「丈山尺樹」をもじったものであり、それに対して後者几董の句も「寸馬豆人」という同じく絵画技法の用語に基づいている。山水画の祖といわれる荊浩の『画山水賦』に「凡画山水、意在筆先、丈山尺樹、寸馬豆人、……此其訣也」とあり、あるいは『画則雑話』（安永五年刊）に「丈山尺樹寸馬豆人として、山の麓或は山の半腹に画く法なり、然を向に丈山を画き、前に尺樹寸馬豆人を画く」という。つまり丈山尺樹の「樹」を「牡丹」にひねったところに道立の俳諧化があった。几董はその俳諧性を汲み取って、対句的に「寸馬豆人」でやり返したのである。舟中での道立の句を絵画的世界のものとして受けとめた几董は同様の句仕立てで応酬した。まさに几董は道立に唱和したのであった。その意味でこのやりとりは一つの俳諧世界といふべきだろう。

このような唱和が成立しえたのは、以前から漢詩的語法に対して兩人共関心をもっていたという素地があつて

のことだろう。この唱和の底流として、夜半亭での漢詩への関心、また虚栗調吟詠の傾向といったものを考慮しなければならぬ。因みに道立には同年春に「朝には雲となり夕ハ桜かな」という同巧の句もある。

ところで『ほく帖』に記録されている安永四年の几董の句に目を通すと、一見して気付かれるほど虚栗調の句が頻出する。例えば、

蘭を愛す賓主の坐未<sub>レ</sub>定

みの虫も啼ヶ我も泣く此ゆふべ

櫓に諷ふ声悲哉秋の霜

など枚挙にいとまない。また『新みなし栗』に入集した几董の句のほとんどがこの年に作られていることがわかる。虚栗調への関心の示し方には並々ならぬものが認められる。

道立の場合も『自在庵句集』によると安永四年にはこうした調への吟詠が顕著である。例えば次のような句である。

虫露底になく鯨ハ山吼んとす

炭やきの翁云雪ハふれ世ハさむかれと

暁の釜悲しミて霜のふらんとす

また几董と同様、『新みなし栗』に入集した道立の三句のうち二句までがこの年に作られている。

この年冬麦水は再び来坂した。この来坂は『十三興』出版のためだったらしい。十月二十三日に二柳が遊行寺で執行した芭蕉忌に麦水・几董は共に列席し再会したようである。<sup>(5)</sup> そのときまでに半ば編集が済んでいた『新み

なし栗』に几董らも既にいくらか句を寄せていたから、麦水との連絡は安永二年以来何らかはあったと思われる。ただしその反映が几董らの吟じぶりであるとは即断できない。

ところで蕪村派最大の撰集『続明鳥』を几董が最終的に編集し終えたのは安永五年九月のことであるが、安永四年閏十二月十一日付霞夫・乙総宛の蕪村書簡の「当冬中ニハ出来のつもりに候」という文面を見ると、この頃既に編集が相当進捗していたことがわかる。集中の句に安永四年以前の制作年次をもつものが多く、安永五年のものがないことから、安永四年中の進み具合が想像できるだろう。春早々にも出版の予定だったのが、経緯は判明しないが、結局九月まで延引した。そこで注目すべきことは、『続明鳥』中に『新みなし栗』と重複する句が三句見えることである。すなわち

憂我にきぬたうて今は又止ミ子

蕪村

霜に歎ず 蟬髭せみひげを握りけり

大魯

夢とんで魂うづむよるの雪

道立

の三句である。虚栗調を標榜する書と蕪村派の大成的撰集たる書が三句共有するというのは興味深いことである。また『続明鳥』中の

仏くすぶ燻くすぶてさらに葱ねぶかを煮夜哉

道立

冬木立月骨髓つひねに入夜哉

几董

という句もそういった傾向の句である。とくに後者は後に『桃李』第二歌仙の発句として再び取りあげられて、脇句を「此句老杜が寒き腸」と蕪村が付けたものである。この付け方は、几董が『附合てびき蔓』で解説してい

るように、『次韻』（延宝九年刊）の桃青、其角の応酬を念頭に置いてのものだった。燕村はこの句に虚栗調の響きを感じ取っていたのである。このように自派の最大の撰集に明らかに虚栗調とわかる句を収録しているというのは、燕村たちが虚栗調をかなり取り取り込んで示すものだろう。これに関しては第二章で詳述する。そしてさらにこの翌年春、几董の『初懐紙』の巻軸に道立・几董の両吟歌仙一卷を、まさに虚栗調であると自ら宣言して載録する。実際は安永四年暮頃になったものだろう。

そこで次に安永五年にはいろいろ。

この年の燕村たちの大きな事業は、前述した『統明鳥』の出版と共に、金福寺に芭蕉庵を再興したことである。燕村の「再興記」にいうように、この中心人物は道立であった。その機会に新たに写経社が結ばれ、それを記念して『写経社集』が出版された。

その『写経社集』一番最後の句は道立の

芍薬は菩薩 牡丹は仏哉

である。道立得意の句法である。芍薬と牡丹について、例えば『本草通串』巻八十七に「今群芳中、牡丹品第一、芍薬品第二、故世謂、牡丹為花王、芍薬為花相、又或以為花王之副也」とあるように、前者を花の王に、後者を花の宰相に、対句的になぞらえる発想は常識であった。他方、同書や『重訂本草綱目啓蒙』巻十などに、芍薬の異称として「牡丹近侍」また「菩薩面」という名があがっている。これらを踏まえて、一句の意は、芍薬を称して菩薩と呼ぶならば、花の第一品たる牡丹はまさしく仏である。というのだろう。一種謎立てのような句だが、芍薬を菩薩に見立てる発想と、一方牡丹＝花王、芍薬＝花相という対とに基づいて、牡丹は仏であるという連想

が生まれた。

この句は『自在庵句集』の安永五年のところにも見え、短夜、ほととぎす、そしてこの牡丹という季題順に並んでいるものである。一方『月並発句帖』によると四月十日に短夜と牡丹を兼題として月並句会が催されている。この句会に道立は実際には参会しなかったが、前回三月十日出席の折に四月の分として出された兼題のために作っておいたのだろう。あらかじめ兼題句を作っておきながら、実際は句会に出席しなかった場合もあることは、几董の句稿に徴しても明らかである。すなわちこの句は四月十日以前作と推測できよう。

ところで安永五年五月二日付士期宛の蕪村書簡に次のような句が書き留められている。

四明山下の古寺にあそぶ

山人は人かんこ鳥は鳥也けり

この古寺は写経社会の催された金福寺である。『写経社集』の「自在庵主、杜鵑・布穀の二題を出して、いづれ一題に発句せよ」という前書きは別の句のためのものだが、尾形仍氏の説<sup>6</sup>のごとく、この句は道立の出題に応じた句であったに違いない。また『丙申之句帖』によると、几董も「金福禪寺写経社会」と題してかんこ鳥二句、時鳥一句を録していることから、これが道立の出題に促されたものであることは明らかだろう。『蕪村句集講義』で「両方共同じく山に住んで居て且不思議なものになつてゐる似寄つた所があるのを対照して殊更に理窟つばくいつて、其裏に滑稽を含んでゐる。」というように、この句もやはり一種謎掛けめいている。そして先の道立の句と同様、対句的語法を用いた同巧の句といえよう。

芭蕉庵再興を発企したのは道立であり、それを記念すべく催された写経社会へ向けて杜鵑と布穀の出題をした

のも道立であった。それを承けて蕪村は語法的にも内容的にも全く対照的な句を作ってみたのである。当然「芍薬は菩薩」の句を蕪村は承知していただろう。道立のは重厚な、そして蕪村のは軽妙な、謎立ての句のようであり、両句共一種知的遊戯を含んでいるのである。ここには二人の連衆としての通い合いがあるといえよう。

この年八月中旬、道立は関東へ下向した。その折几董の送別吟と共に、蕪村も

送るに湖の月をもてす答ふるに富士の雪を以テせよ

を送別吟とした。このようなもはや発句とはいえないほどに破調の極をきわめた句が道立に宛てた饞別吟であり、えたことには意味があるだろう。このような極端な破調は几董も前年、「鳴はか、しをしらず案山子もとより鳴を不知」と吟じている。蕪村の送別吟が生まれたのもこうした状況を背景としている。この句が道立に宛てた送別吟でありうるのは、句自体の意味によってよりも、むしろ彼らの連衆としての精神的繋がりによってであろう。

最後に一つの資料を掲げてこの章を終わろう。それは安永五年十月十三日付几董宛書簡のなかで、蕪村が「尚々みなし栗、此者へ御かし可被下度候。」と追伸している件りである。これによると、当時彼らの間で「虚栗」が共通の関心の対象であったことがわかる。それはこの章で見えてきたような虚栗調への関心の高まりを裏づけるものである。

以上見てきたように、安永期前半蕪村たちは虚栗調に対してかなり関心を寄せていた。そしてその関心の高まりは彼らの連衆としての交流のなかでありえたものであったのである。

この章では蕪村たちが虚栗調というものにどんな意識で対し、いかにそれを受容し、自己の俳諧へ取り込もうとしたかを考えてみよう。その際、麦水の態度と比較しながら、考察することは有効なことであろう。

第一章で安永五年の『初懐紙』に几董・道立の両吟歌仙<sup>7</sup>が虚栗調で行なわれていることを述べた。その歌仙に道立の長い序文が付されている。ここではそれを掲出する。便宜上三段に分け、その順に従って考察してゆこう。

(一) 蕉翁の化行ハれて諧歌の正調親く其教を受るもの、述て文に歌て音なり。然りといへども諸家各門を建、紛然として邪路旁徑往々藪塞す。故に正路を得んと欲するものは必先其源に沂り、そのはじめを原ぬべし。翁の化興て体裁の原とするものハ、虚栗集これが嚆矢たり。所謂流行変化は教の漸々するもの也。此ゆへに初学栗調を学ぶを先務とせんか。

難渋な文章である。要するに、芭蕉に打ちたてられた俳諧の正風がしばらく低迷していたが、それを復興するための第一の方策として蕉風の根源たる『虚栗』に遡り、それを学ばなければならない、というのである。

一方麦水は『新みなし栗』の附言に次のごとくいう。「岐路然たりといへども、只蕉翁の意通ずる方を以て直道とす。故に七部集を味ふて沂り見るに……みなし栗、甚蕉翁の意を求ル道なりとして尊<sub>ミ</sub>信ず。」「虚栗」をまず尊重するという基本においてこの二つの文は一致している。ただし麦水の「尊<sub>ミ</sub>信ず」という態度と、道立の「初学虚栗調を学ぶを先務とせんか」という学習の態度とは若干の違いを認めないわけにはいかない。

ところで蕪村は若い頃関東遊歴の頃に既に初期蕉風に心を寄せていた。几董が師蕪村の言葉として伝える次のような文言がある。<sup>8</sup> 「ひとり蕉翁の幽懐を探り、句を吐事瀟洒、もはらみなし栗・冬の日の高邁としたふ。」蕪村二十七歳という。『虚栗』への関心が青年期に既に胚胎していたことを自ら述懐したものと見て注目に値する。

さらに『明和辛卯春』（明和八年）に「延宝之句法」として蕪村の次のような句がある。

餅旧苔の蟻を削れば風新柳のけづりかけ

明和八年は蕪村が夜半亭二世として立机した翌年である。すなわちこの書は、専門俳諧師として世に名乗りをあげた最初の意義深いはずの歳旦帖であった。そういう書に「延宝之句法」と注記した句であった。句は全体として『和漢朗詠集』の「気霽風梳新柳髪、氷消浪洗旧苔鬚」を踏まえている。漢詩のこのような換骨脱胎の法が延宝の句法であると認識していたわけである。

同年『夜半亭月並』と題された小摺物に

しぐれ松ふり鼠の通ふ琴の上

という句がある。その表書きに「天和・延宝のはせを流ニテ御座候」と自筆で注記し、同時に「談林一変、蕉流起」と前書きも付している。

ところで『俳諧新選』に編著者嘯山は巻五に雑部として「檀林体」の項を設けた。そのなかに例えば彼自身の「毯栗の笑テ曰吾老イヌ矣」という破調句を載せている。また同じく蕪村の「雪の河豚鮫鯨の上にたゝんとす」という句は、『虚栗』所集の芭蕉の句「雪の鮎左勝水一無月の鯉」を明らかに踏まえたものである。嘯山や蕪村にとって「檀林体」とは以上のような句体を意味していた。その他この項には虚栗調というべき句が十数句並んでいる。また明和八年『日発句集』で「談林」と頭注して、几董は「先陣後陣にかへる雁やらしと几巾の十文字」という句を試みた。談林体とはこのような破調的表現、奇警的発想が一つの特徴であると几董も考えていたようである。とすると蕪村が「天和・延宝のはせを流」また「延宝之句法」というのは、末期談林を含みながら、蕉風初期の

展開に至る句法を指していたのだらう。その頂点、あるいは結節点に位置するのが『虚栗』ということになる。

このように見てくると、『虚栗』を蕉風の原因と見なし、その風体に学ぼうという道立の主張は、蕪村や几董のものでもあった。それは麦水との接触が始まる以前から蕪村たちの関心の対象となっていたことがわかる。

道立はここで一旦立ち止まり、もつと広い別の観点から『虚栗』を考え直す。

(二) 爰に人あり、日、虚栗ハ一是非。子が所謂牛鬼蛇神なるものにちかし、と。又いふ、猿蓑、あら野の二選最上精選とすべし、と。或は、冬の日、春の日を以て標準とし、深川、ひさご、炭俵をもて純粹となすあり、と。又或ハ、天和・貞享・元禄等の年譜をわかちて、勝劣をいふものすべて各門戸を建るにあり。其弊や詭言異説争競の端をなす。ア、悲哉、方と円と熟をか取、熟をか捨ん。余別に説あり、繁を厭て復贅せず。

まず『虚栗』のみを正風と限定することに疑問を発し、続いて他の七部集のいずれかに固執し、ひいては確執を惹き起こすことを批判する。後年になるが、『附合てびき蔓』（天明六年刊）に几董は「近世專蕉門の附合世に行はる、といへども、支流まち／＼にして門戸を建、己が好ム処を是とす。其好むところ一概にして、或はみなし栗をもて向上の一路也とし、あるひは炭俵をもて老成のいたりとす。その意旨広からずと謂つべし。」と述べている。道立の主旨と共通した内容をもつ。門戸を張り合つて、互いに排他的になることを戒めているのである。虚栗も例外ではない。ただし道立も几董も、いろいろな句風に心を寄せること自体を批判しているのではない。『あけ鳥』の序にいうように「まことの蕉風に志者」の多様性を承認しているのである。一種の相対主義である。道立のいう「一是一非」であり、蕪村のいう「とかく片よりは万芸ともあしく候」（『騏道宛書簡』）である。

そしていろいろな句風のこのような相対的評価は芭蕉そのものも相対化する。もちろん芭蕉を限りなく崇拜し

てやまなかつた蕪村ではあるが、安永二年十一月十三日付の晝台宛書簡のなかで「拙老はいかいは敢て蕉翁之語風を直ちに擬候にも無之」ともいう蕪村でもある。また富葉に宛てた手紙（九月十六日付）にも「蕉流のはいかいは少しく違ひ候得共、……勿論蕉風流にのみ泥み申候にも無之候」と、当時のいわゆる蕉風にいわば一定の距離を保つておこうという姿勢を打ち出している。この姿勢は結局、蕪村に最も親しく師事した几董が語る次のような蕪村の境地に至るものである。すなわち「俳諧に遊びては芒蕉・其角の高邁に倣ひ、はた諸家の口質にわたり、其縦横自在なる事集めて大成するものなり」（『月並会句記』）という。この境地は芭蕉にのみ拘泥する立場からは相当の径庭があり、ましてや『虚栗』とか『炭俵』とかに偏するところとは無縁の立場である。

麦水はそれに比してどんな態度をとるだろうか。「庵主（麦水）曰、是蕉翁貞享中の句風、直に清意味を求べきの道也。……諸流無風雅、蕉門独風流」（『春濃夜』）<sup>9</sup>と伝える麦水の言葉がある。これは以上見てきた蕪村たちの考え方とは懸隔があろう。前に引いた『附合てびき蔓』での几董の批判は、まさにそういう麦水の一概に好む態度に向けられていたのだろう。同様に几董と両吟歌仙をともした道立の序文も、同じ立場から発せられたものなのである。そしてさらに道立は次のように結論する。

(三) 今や此篇試に虚栗の調に擬して、しばらく直派根源に遊ぶ。世の栗調をいふものと異也。因て数言を題してこれが小序とす。

「世の栗調をいふもの」とは麦水に外ならず、同じく虚栗調を口にしながら、その麦水とは立場の異なることを明確に宣言したのである。そして道立は虚栗調に対する姿勢を明らかにする。それが「今や此篇試に虚栗の調に擬して、しばらく直派根源に遊ぶ」である。こういういい方をするのは道立一人ではない。蕪村は「今戯れに

其風調に倣ふ」(『蓑虫説』)といい、几董は「承応・延宝の調を戯に」(『発句集』)という。あるいは「栢庭の語風に倣ひて」(蕪村)、「倣伊丹古風」(道立)など同様のいい方は枚挙にいとまがない。実にさまざまな句法を擬し、多様な先人の風調に倣おうとしていた様子がうかがえる。

一例をあげてさらに詳説してみよう。

乾 鯉 や 琴 に 斧 う つ ひ ッ き 有

これは蕪村得意の句だったらしい。『統明鳥』や『蕪村句集』に「琴」と音読符を付す。『句集』ではさらに「倣素堂」と前書きし、また自画賛には「琴ハ声によむべし。素堂がうき葉の句法なるべし」と注する。これは『虚栗』の素堂の句「浮葉卷葉此連風情過たらん」の連をレンと音読する句法のことを指す。

一方安永三年秋『ほく帖』に几董は「探題倣素堂之調」として二句を録している。探題というからには何らかの句会でのものだろう。また安永四年夏、素堂の「浮葉卷葉」の句を発句として、蕪村は冊魚を脇起し両吟歌仙を試みた(『紫狐庵連句集』但し未満)。さらに同年秋、『ほく帖』に几董は「酒なき夕琴に柳の散かゝる」と吟じ、やはり「琴」を音読させている。『新雑談集』に素堂と蕪村の両句を併出して、「蕉翁曰、素堂が句、蓮と音によまざれば、一句の手柄なきに似たりと。暫く是を考るに、蕪叟の琴に斧うつといへるも趣相おなじ」と几董は記して、「琴」音読の手柄を蕪村に帰している。このように蕪村門の人々はこの頃素堂の句法に関心を持ち、色々な角度から句作を試みていたことがわかる。そういうなかで蕪村の「乾鯉」の句ができたのである。天明二年十二月十一日付書簡でも蕪村は「桐火桶無絃の琴の撫ごゝろ」の句を示して、素堂の句法によったことを注記している。後年まで蕪村の気に入っていた句法なのであろう。

以上のような蕪村たちの関心の示し方は、もちろん素堂に限ってのことではない。諸家の口質、句風に学ぶべきことはしばしば説いている。例えば「其角之豪壯、嵐雪之高華、去来之真卒、素堂之洒落、各可法」と、「取句法」の一条にいう。「各可法」とは、いずれかの風体に偏せず、また一つの立場にのみ拘泥しない姿勢をいうのである。

道立の「試に虚栗の調に擬して」両吟歌仙を巻くというのが、どういう意識に基づくものなのかはや明らかであろう。虚栗調は、蕪村たちにとって、さまざまなやり方で句作を試みる際の一つの方途なのである。唯一の方途ではない。それが「試に……擬」すことなのである。天明三年の『初懐紙』に載せた几董・之兮の虚栗調の両吟歌仙に、「擬延宝天和調」と題したのもやはり同じ意識であろう。

このように虚栗調は蕪村たちにとって俳諧修業の方法としての意味があったのである。そしてそれは同じような志を抱く連衆の交感においてこそ意味を有するものであった。安永八年に始まる月次の会が衆議判を原則とする「俳かい修業の学校」（『連句会草稿』月居序）であったように、その修業もたった一人の作業でなく、連衆のやりとりのなかでおこなわれるものであった。その意味で彼らの方法は方法にとどまるものでなく、第一章で見たような、見事な詩的共感を生み出す契機でもあったのである。

注

(1) 池上義雄氏「几董年譜」（『国語と国文学』十四の五）参照。

(2) 『から松葉』上、道立の蕪村追悼文に「我翁に師事することなしといえども、其知遇を荷ふこと二十有余年……」とある。

- (3) 同氏編著『蕪村自筆句帳』（昭和四十九年）翻刻二一九～二二〇ページ。
- (4) この書は現在原本が見当らず、穎原文庫蔵の写本と乾猷平氏「蕪村と其周囲」（『同人』巻七一）所集の翻刻とによつたが、両者に数句の出入りがある。しかし大異はないので、およその傾向はわかるだろう。
- (5) 西山隆二氏「不二葦二柳」（『大阪と蕉門』昭和二十九年）には「几董句稿」によると二柳はこの年十月芒蕉忌を修し、几董・麦水共に参会してゐる」とある。確かに『ほく帖』には几董が出席したことは記してあるが、そこで麦水と再会したとは書いていない。しかしその頃丁度大坂にいた麦水も当然出席したと思われる。
- (6) 同氏前掲書、翻刻八八ページ。
- (7) 両吟と書いたが、厳密に言えば、烏有という人が一句だけ付けている。ところがこの烏有という名は蕪村一派の俳書や句会で一度も見ないものである。この一つだけの付句は、
- 露に鎖る草かくれ人  
トカセ
- である。また拳句は、誰の名もなくて
- 春の烏ウの烏カ有アル
- となつている。こうして見ると烏有という人物はきつと実在しない。恐らく几董・道立の転合であろう。従つて実際は両吟である。
- (8) 『桃李』の原稿に几董が添書きして、天明七年門人下村春坡に与えたものの一部。
- (9) 『国書総目録』によるとこの書の所在が確認できないので、『麦水俳論集』日置謙氏の解説より孫引き。